

ともに考え、ともにつくる



自由な発想で 挑戦し続けます

朝日新聞社代表取締役社長 渡辺 雅隆

技術革新やグローバル化によって、私たちの暮らしはめまぐるしいスピードで変化し、社会は複雑になっています。多くの人が抱える問題や課題を解決するのは、一筋縄ではいきません。だからこそ、立場を越えて課題を共有し、さまざまな意見を出し合う「言論の広場（フォーラム）」としての新聞社の存在が、より重要になります。

ともに考え、ともにつくるメディアへ——。朝日新聞社は2015年1月、課題の解決策をともに探り、より良い明日をつくるのに役立つ総合メディア企業へと進化することを誓いました。暮らしを豊かにする情報やサービスを届けるために、朝日新聞グループすべての力を注いでいます。

次世代のメディア像を追求

次世代のメディア像を追求する「未来メディアプロジェクト」では、議論の場を広げようと、記者と参加者が話し合うイベントを開いています。マサチューセッツ工科大学(MIT)メディアラボと共催する「未来メディア塾」、慶大大学院の協力で開くワークショップ「未来メディアキャンプ」、仕事帰りに気軽に参加できる小規模の「未来メディアカフェ」とメニューを増やしてきました。どれも人気が高く、斬新な意見やアイデアが飛び交います。2015年にはほかに、メルケル独首相やマイクロソフト創業者のビル・ゲイツ氏が朝日新聞社で講演し、若者や識者と語り合いました。

朝刊には、身近な問題や課題について考える「フォーラム面」をつくり、さまざまな見方や主張を紹介しています。ニュースサイト「朝日新聞デジタル」でも意見を募り、そこで浮かび上がった課題を新たなニュースとして発信します。日々の紙面づくりに社外の声を反映するため、独立した立場で記事を点検する「パブリックエディター」の制度も導入しました。日本の新聞では初めて、社外の識者をパブリックエディターとして迎え入れました。

私たち自身も、社会的な課題の解決に役立つ新しい商品や事業の開発に乗り出しています。その推進役が、未来メディアプロジェクトの一環で新設した実験工房「メディアラボ」です。社員のアイデアを募り、発案者が自らの手でクラウドファンディング「A-port」や「朝日自分史」などの事業をスタートさせました。多様なサービスに欠かせない技術部門も強化しています。

もちろん、もっとも大切にしているのは、1879(明治12)年の創刊以来140年近く磨いてきたジャーナリズム、報道にかかわる事業です。言論の自由を貫き、



国民の幸福に献身する。朝日新聞網領に掲げた私たちの決意は、いつの時代も変わりません。

かつてリクルート事件を追及した調査報道の伝統は、脈々と受け継がれています。優れた報道に贈られる新聞協会賞は、2014年度まで3年続けて受賞しました。国際理解に貢献した記者に贈られる「ボーン・上田記念国際記者賞」には、2010年以降だけで3人選ばれています。国内外で2千人を超える記者たちが、真実に肉薄しようと努力を重ねています。

サービスで暮らしを豊かに

はやくからインターネットでの発信にも力を入れ、「朝日新聞デジタル」は創設から20年たちました。スマートフォン向けのニュースサイトなど新しいサービスを次々と展開し、記者や取材班はソーシャルメディアで最新情報を発信しています。

スポーツや芸術、文化の分野で手がけてきたイベントも、報道と並ぶ大事な事業です。高校野球や吹奏楽・合唱コンクール、「大英博物館展」や「鳥獣戯画」のような展覧会などは高い評価を受けています。これからも、若者やシニアなど世代ごとの関心に合わせた事業を立ち上げ、暮らしを豊かにするサービスを充実させます。

情報やサービスを通じて一人ひとりがつながり、その輪の中にいつも朝日新聞社がいる——。それが、私たちのめざす姿です。これからも「新聞社とはこういうもの」といった既存概念にとらわれず、自由な発想で挑戦を続けます。

代表取締役社長 渡辺 雅隆

課題の解決を 探る 「場」をつくる



社外の方々和記者が課題の解決を探る「未来メディア塾2015」。司会はジャーナリストの堀潤さん。



参加者と記者が課題の解決策を出し合う=未来メディアキャンプ



専門家と参加者のさまざまな意見が飛び交う=未来メディアカフェ

社会で活躍する人、記者、専門家が 一緒に向き合う「未来メディア塾」

「未来メディア塾」は、社会で活躍する人たちと記者らが、ともに社会課題に向き合い、考え、解決に導くアイデアをうみだす場です。朝日新聞社は、社外の方々との双方向の場を設けたいと、さまざまな機会をつくっています。マサチューセッツ工科大学 (MIT) メディアラボと開催した「未来メディア塾2015」では、記者と専門家、来場者やMITメディアラボの研究者が一緒になって、「ロボットとの共生の考え方」「これからの地域創生を考える」などテーマごとに活発な議論を交わし、その様子をウェブ上でライブ中継しました。

「未来メディアキャンプ」では、社外の方々和記者と一緒にフィールドワークを実施しています。課題の解決に向けて問題意識を持つ若い人たちが毎回多く参加しています。学びの場として、隔月で「未来メディアカフェ」も開催しています。「人工知能」「ドローン」といったテーマで、専門家を招いて、記者と参加者が話し合いました。

朝日新聞社は、情報を基に、人々のより豊かな生活に貢献する企業でありたいと考えています。新しい技術を積極的に採り入れて、メディアや報道のあり方に加えてイベントのあり方も進化させていきます。一方的なプレゼンテーションではなく、さまざまな考え方を持つ参加者同士が意見を交わし合うことで、新たな発想がうまれる場を提供していきます。

ビル・ゲイツ氏との対話イベント開催

未来メディア塾スペシャルとして、朝日新聞社は米マイクロソフト創業者で社会貢献活動家のビル・ゲイツ氏を迎えて、2015年12月に対話イベントを開催しました(ビル&メリンダ・ゲイツ財団、寄付月間推進委員会との共催)。社会貢献活動にどう取り組んでいけばよいか、楽天の三木谷浩史会長兼社長や若い方々と対話しました。



新ビジネス開発に取り組む「実験工房」 メディアラボ

メディアラボは、「新聞業とはこういうもの」という常識にとらわれず、全く新しいことに挑戦していく実験工房です。現在、若手中心のメンバー約30人が、新しい技術を持つベンチャー企業などと連携しながら、失敗を恐れずに新商品・新ビジネス開発に取り組んでいます。

A-port

夢を実現したい人と支援者をつなぐ



A-portは、インターネット上の不特定多数から資金を集めるクラウドファンディングのサイトです。新聞社が持つ情報発信力・編集力を強みに、夢やアイデアを実現したい人と、共感し支援する人をつなぎます。捕鯨をテーマにした映画のプロジェクトでは、2325万円が支援者1824人から集まりました。日本のクラウドファンディングの資金調達案件では、集まった金額ではその時点で9位、支援者の数では5位でした。このほか障がい者らが働く花屋の活動のための車を購入するプロジェクトなども多くの支援を集めました。A-portは、メディアラボが事務局を務める社内の新事業創出コンテスト「START UP!」の最優秀提案として生まれました。

沖縄の紅型(びんがた)デザインの食器を制作するプロジェクトを起案して、A-portで資金調達した沖縄在住の新垣優香さん



A-portのチーム



地球から950光年離れた「死にゆく星」からの電波の観測データを元に、音楽CDを作るプロジェクトには約277万円が集まった。背景の画像はその天体



未使用のまま廃棄されてしまう床材を活用し、バッグを製作するプロジェクト。デザインの中で、エコな生活づくりをめざしている



アクセラレータープログラム

ベンチャー企業を支援

ベンチャー企業を支援し、彼らが持つアイデアや行動力を活用して一緒に成長しようという「朝日新聞アクセラレータープログラム」を始めました。2015年7月に始まった最初のプログラムには、生まれたばかりのベンチャー企業7社が参加しました。参加者は東京・渋谷にあるメディアラボ渋谷分室でサービス開発をしたり、事業計画づくりなどについて専門家(メンター)から指導を受けたりしています。有望な事業に対して、朝日新聞社が出資も検討する仕組みです。



メディアラボ渋谷分室に集まった参加者ら

ウェアラブル・テック・エキスポ

身につけられる情報機器の国際展

メガネ型や腕輪型など、身につける情報機器として注目されるウェアラブル端末。その最先端が一堂に会する国際展「ウェアラブル・テック・エキスポ」を主催しました。米国で開かれている催しを日本に招致したもので、2015年9月の2度目の開催では、あらゆる製品やサービスがインターネットにつながる「モノのインターネット

(IoT)」や仮想現実(VR)などにも幅を広げました。メディアラボは、電子ペーパーの技術を活用し、図案化されたニュースをバッグやTシャツに表示する「ウェアラブルニュース」の試作品を展示しました。



バッグに組み込んだ「ウェアラブルニュース」。国際宇宙ステーションでのレタス栽培の話題を表示している



メガネ型端末で仮想現実を体験



朝日自分史 あなたの本づくりをサポート

人生を振り返る本づくりをサポートするサービス「朝日自分史」を立ち上げました。朝日新聞の記者経験者が取材・編集をしたり、朝日新聞社に保存されている写真や紙面を「生涯の一冊」に組み込んだりでき

ることが特徴です。2014年夏のサービス開始以降、戦中戦後を駆け抜けた看護師の回顧録、北海道・知床への移住記、高校教師と生徒たちの交換日記の記録などさまざまな作品が生まれています。

パブリックエディター制度

読者と本紙を橋渡しし 読み手の視点伝える



編集部と意見交換するパブリックエディター(2015年9月)



記事に対する意見をより早く報道へ生かすため、2015年4月にパブリックエディター制度が誕生しました。日本の新聞社では初めての試みです。パブリックエディター(PE)は社内外の数人で構成し、編集部から独立した立場で報道内容を点検します。記者や編集者らが見落としがちな「読み手」の視点を編集部に伝えることで、より正確で公平な紙面をめざします。

パブリックエディターは「お客様オフィス」に寄せられた読者の声、紙面モニターなど、社外からの評価

や意見の主なものに目を通します。ほぼ週1回のペースで会議を開き、これらの声に基づくパブリックエディター自身の見解、注目した報道や表現に対する提案・疑問を投げかけます。編集部内に説明を求めることもあります。日々の紙面づくりやジャーナリズムのあり方などについて、率直に論じ合う場です。

パブリックエディターの活動内容は、紙面や朝日新聞デジタルでも随時発信し、読者と本紙の「橋渡し役」になっています。

フォーラム面

読者の意見をもとに取材・紙面制作 生活に密着したテーマあらわに

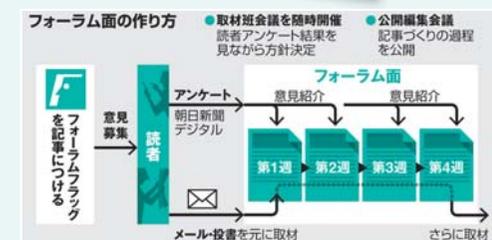


テレビ会議で、東京本社の記者と打ち合わせをする読者(右)とフォーラム編集長(中央)ら=大阪本社

読者の意見に耳を傾け、一緒に議論し、新しいニュースを模索する場として、フォーラム面は2015年4月にできました。議論の広場として、朝日新聞デジタルにフォーラムページをつくり、読者の意見を募ります。「格差」「PTA」「いじめ」「町内会」などで活発な議論が起きました。日曜と月曜の朝刊に掲載するフォーラム面は、寄せられた意見を紹介しつつ、記者の取材でさらに議論を深めます。

これは読者と一緒に新聞をつくる試みであるとともに、新しい記者のあり方の模索でもあります。専門分野を深掘りするだけでは得られなかった視点や、ふだんの紙面であまり紹介できなかった、読者の生活に密着したテーマがあらわになります。

読者の提案をもとにテーマを選んだり、読者代表に取材班に加わってもらったり、会議を公開したりなど、取材過程をオープンにする試みも続けています。



ACT(アクト)

部門を超え議論、若手社員が改革案

朝日新聞社は、再生と成長に向け、部門を超えて若手・中堅社員が議論する朝日版クロスファンクショナルチーム(略称ACT=アクト)の活動を2015年5月に始めました。第1弾となるACT11チームは3カ月の議論を経て15年8月末に数百項目の改革案を社長に提出、経営陣はそのうちまず意識改革策や新事業など数十項目を実行に移し、中期経営計画にも一部を取り込んでいます。





自分が見たもの 積み重ねて書く

国際報道部記者 杉山正

取材で訪れた国は中東アフリカ、欧米など30カ国以上になります。パスポートの100ページ以上がスタンプで埋まりました。海外では政治、経済、社会など広範なテーマを扱い、取材相手も赤ちゃんから大統領とさまざまです。

特に紛争現場には20回以上、足を運びました。突然平穏な生活が一変する恐怖。憎悪と絶望が渦巻く。発表された犠牲者数では伝わらない現実が現場にはあります。格差や不正義など紛争にはさまざまな要因が絡み合います。

中央アフリカの紛争現場では、つい先日まで共に暮らしていたキリスト教徒とイスラム教徒が互いに相手

がいかに残虐が非難し合っていました。また、パリでの風刺画家へのテロ事件では、「表現の自由」の下で国内が結束する中で、疎外感を感じてきた一般のイスラム教徒、さらに過激思想の若者たちにも取材しました。

一つの側面だけでないものを伝えようと、現場取材を重ねました。紛争取材に限らず「これはこうしたもの」「この人はこう」と善悪を含め、初めから決め付けないようにしています。自分の考えは柔軟に。そして伝聞に頼らず現場に行き、自分が見たものを積み重ねて書く。それが事実に基づく唯一の方法。そのように思いながら仕事をしています。

経歴

2000年入社。秋田、横浜両総局を経て東京社会部で警視庁、宮内庁などを担当。11年からナイロビ支局長、13年からヨハネスブルク支局長を務めた。14年度には優れた報道で国際理解に貢献したジャーナリストに贈られるボーン・上田記念国際記者賞を受賞。

日常生活や会話が取材のヒントに

社会部記者 吉浜織恵

東京都庁の取材を担当しています。2020年の東京五輪・パラリンピックに向けた準備や防災への備え、教育改革など、都の取り組みは分野が広く、内容も多岐にわたります。これらの政策が、都民の暮らしにどんな影響を与えるのか。まちの未来を描くのは政治です。選挙で選ばれた首長や議員がどんな政策を考え、税金をどう使おうとしているのかに着目して取材をしています。

コンサルタント会社から転職して入社しました。事件や事故、災害の現場に行く。人に会い、話を聞く。記者の仕事はシンプルですが、驚きと発見に満ちています。

現場で見たもの聞いたことを正確に伝えることが基本ですが、自ら問題意識をもって掘り下げる取材もあります。

都庁の担当になる前は、日常生活や取材先、仲間との会話で気づいたことをヒントにした記事を書きました。人気の映画や漫画に共通する「哲学」に時代のニーズを読み取ったり、18歳選挙権は知らないという若者たちに話をきいて、選挙制度の課題を考えたり。

新聞の社会面は、社会的背景がある大ニュースが多いですが、普段見過ごされがちな身近なところにニュースが隠れていることもあります。アンテナを磨き、ひとりの生活者として記事を届けたいと思います。

経歴

2001年入社。広島、京都両総局などを経て、06年から大阪社会部で大阪市役所と大阪府庁の担当を計5年務めたほか、大阪府警も担当した。14年から東京社会部。社会部遊軍を経て、現在は東京都庁を担当。

朝日ソーシャルリスニングチームASLiT(アスリート)

膨大なネットの情報 ニュース発信に生かす

アスリートASLiT(Ahahi Social Listening Team)は、ネットに刻一刻と書き込まれる膨大な情報からニュースにつながる情報を選び取り、ニュース発信に生かそうという試みです。

一つの軸は、ツイッターを中心としたソーシャルメディアの情報から、事故や災害の発生情報をいち早く検知する「発生覚知」です。「火事」や「爆発」などの単語を含むつぶやきを監視しながら、現場を見た人などからのメッセージを捉えます。政治家の失言など、広い範囲でのニュース発生を警戒します。

もう一つの軸となる「ネタ発掘」は、掲示板やブログなどに埋もれている事実や視点を掘り起こす作業です。ネットには、さまざまな現場で働く人の生の声を書き込まれるため、不正をあばき出したり、専門的な視点から見たニュースの問題点などが指摘されたりすることが多々



ツイッターなどネットの情報に目を凝らす

あります。それを検索によって探し出そうという試みです。

これまで手が届かなかった情報や視点を積極的に収集し、新しい報道のあり方を模索します。

データジャーナリズム

ネット上の膨大なデータを分析して報じる



特別報道部専門記者
須藤 龍也

「人の話を聞いて記事を書く」のが新聞記者の仕事です。ところが数万、数百万の膨大なデータを駆使して記事にする、全く新しい取材手法に取り組んでいます。データジャーナリズムです。ノートとペンを脇に置き、大画面のデスクトップパソコンが必携の取材ツール。例えば全世界で毎月3億人が日々の身辺雑記を書き連ねるツイッターは、世の中を知る格好の分析対象です。

自民党が圧勝した2014年12月の衆議院選挙では、約350万件のツイッター投稿から有権者の意識を探りました。「アベノミクス」「消費増税」に関する投稿が3分の1近くを占め、安倍政権が争点化に成功したことを報じました。一方で全候補者の投稿の8割近くが演説の告知と投票のお願いで、政策論争が活発化しない「ネット選挙」の実像を浮き彫りにしました。

新聞とはファクト(事実)の積み重ね。その集合体とも言えるデータに耳を澄ませ、報じるすべはないものか。統計学の本が近ごろの愛読書です。

インフォグラフィック活用

災害からくらしの情報まで分かりやすく

朝日新聞の紙面は、少しずつ進化しています。その一つに、インフォグラフィックの活用があります。地図やグラフ、イラストなどを取り込んで、くらしの情報から国際的な紛争まで、ニュースをビジュアルで分かりやすく伝える工夫をこらしています。

インフォグラフィックは年々大型化し、表現も深まっています。

大きなきっかけは、東日本大震災の報道でした。津波の脅威や福島第一原発事故の状況を見開き2ページをつかって分かりやすく伝えてきました。その後も、御嶽山噴火時の分析や複雑な国際関係の読み解き、安全保障政策の解説など、インフォグラフィックの番目は増えています。情報が急速に複雑化していく中、常に新しいアイデアと表現で物事を分かりやすく伝えていきます。

朝日新聞は、ビジュアル化を通して、よりよい閲読体験をできるように、これからも進化を続けていきます。



表現の引き出し増やす努力中



デザイン部デザイナー
よしゆき
小倉 諒之(2013年入社)

ニュースの理解を助けるために、情報を整理し、ビジュアル化を進めるのがデザイン部の仕事です。記者の依頼や自身の提案で、限られた時間内で記事につけるグラフィックを仕上げます。大きなプロジェクトになると、数週間前から記者と打ち合わせをしながら進めていきます。1年目は、新聞社ならではのスピードに慣れるのに必死でした。まだまだ力不足を感じることもあり、表現の引き出しを増やす努力をしています。どのような紙面だったら読者の目をひくのか、分かりやすくなるのかをいつも考え、文字でできている新聞を、より魅力のあるものにするため、日々奮闘しています。

朝日新聞社はデジタルメディアの特性を生かした企画やサービスに取り組んでいます。CGや動画を駆使した「朝デジスペシャル」(このページで紹介する「チャレンジド wonder athletes」「築地 時代の台所」)、スマートフォンに親しむ世代に向けた新しいニュースサービス「withnews」……。新たな挑戦は続きます。

ワンダーアスリート チャレンジド wonder athletes

障がい者アスリートに迫る

朝日新聞デジタルのオリジナルコンテンツとして、限界に挑む障がい者アスリートに迫る連載「チャレンジド wonder athletes」を2015年10月10日に始めました。

ここで伝えていくのは、アスリートたちの超人ぶりです。義足ランナーのクラスの中には、ウサイン・ボルト選手の世界記録に肉薄するタイムをたたき出している選手もいます。彼らの肉体や高度な技術などにデジタルならではの動画やCG、写真、密着記事で迫ります。障がいのある方や高齢者にもコンテンツを楽しんでいただけるよう「アクセシビリティ」に配慮しています。

<http://www.asahi.com/special/challenged/>



築地 時代の台所 市場の魅力たっぷり

首都の食欲を支え、世界の観光客を引きつける東京・築地市場。2016年秋に予定される豊洲新市場への引っ越しを前に、特集「築地 時代の台所」では開場80年の記録を進めています。

マグロの世界や季節のにぎやみ、600以上ある仲卸店のマップなど、一冊の本に迫る分量の内容です。見て触って味わいながら、食文化を伝える貴重な場を追体験できます。

<http://www.asahi.com/special/tsukiji/>



withnewsの打ち合わせ



ウィズニュース withnews

若者向け ニュースサービス

「withnews」は、2014年7月に誕生した朝日新聞社の新しいニュースサービスです。スマホに慣れ親しむ若者に新聞社のニュースを届けるために生まれました。

編集部では、人々が「今、知りたいこと」を素早く記事にしています。ネット上のうわさも、真剣に取材します。やわらかい話題をきっかけに、確かなニュースに触れるきっかけを生み出しています。

読者との双方向性を形にしたのが取材リクエストです。新聞記者の発想を超える取材のきっかけを、毎日のようにもらっています。ゼロから始めたサイトは、2015年9月に2200万ページビューを達成しました。
<http://withnews.jp/>

バーチャル高校野球 全試合をライブ中継

2015年夏、朝日新聞社は朝日放送と日本最大級のオンライン高校野球サイト「バーチャル高校野球」を立ち上げました。朝日新聞が各地で取材した記事や写真、データに加え、朝日放送がテレビで放送する全試合のライブ中継、ダイジェスト動画や過去の名場面などをPCやアプリを含むスマートフォンで見られるサービスで、高校野球の新たな楽しみ方をお届けしました。また、26の地方大会の決勝もライブ配信し、今までは見られなかった地域の試合も見られるようになり、ユーザーの皆様から高い評価を受けました。

<http://www.asahi.com/koshien/>





アイデアひねり、 「新しい新聞」のカタチを模索

堀江 孝治 2005年入社
メディアラボ

築地の印刷工場に5年、システム部門に5年在籍し、現在メディアラボでクラウドファンディング「A-port」や画像認識アプリ「朝日コネクト」などを担当しています。A-portは2015年3月に始めてから半年余りで数十件のプロジェクトの資金募集をして、その多くが目標金額を達成しました。プロジェクトの起案者と相談しながらサイトを作り、目標額に達した瞬間の喜びは格別です。

このほか紙面とデジタルコンテンツをつなぐ新たな試みとしてサービスを始めた朝日コネクトでは、スマホを紙面の画像にかざすと関連する動画が流れ出すといった、活字や写真だけに頼らない情報提供を模索しています。新しい新聞のカタチ、もしくは新聞という概念にまったくとらわれないアイデアを生み出し、それを実現していくのがこのメディアラボかもしれません。新しいことに挑戦したい人にぜひ来てほしいと思います。



モバイル向けに、 お客様に喜ばれるページ作り

荒川 万利恵 2010年入社
デジタル本部ビジネス企画開発部

ビジネス企画開発部は、さまざまなデジタルサービスを通じて編集部が作ったコンテンツをお客様に届けています。私の所属はモバイル向けのサービスを他社と協同で企画・運営する「モバイルチーム」。「朝日・日刊スポーツ」をはじめ三つのサイトを担当しています。

一年で最も大きいイベントは夏の高校野球です。スコア速報や試合データなどデジタルならではの臨場感あるコンテンツ、魅力的な報道写真を生かして「お客様に喜ばれる」ページ作りを心がけています。お客様の反応はページビューや会員登録数、コメントなどでリアルタイムに表れます。成果を出せた時の達成感は大きいものがあります。

2歳になる長女がいます。育休から復帰して半年で通常勤務に戻ることができました。必要に応じて、パソコンを自宅に持ち帰って仕事もでき、働きやすい職場環境です。



顧客視点を第一に、 サービスのシステムを構築

落合 隆文 2007年入社
情報技術本部開発部

情報技術本部の開発部は、朝日新聞社のシステム開発とサービスの企画支援などを担う部署で、私は三つのチームにかかっています。朝日新聞デジタルなどの改善を手がける開発部内のチーム、人とペットのためのウェブメディア「sippo」を運営するメディアラボの新規事業チーム、最新技術を調査する本部内の研究開発チームです。「sippo」にはサービスの企画段階から技術者として参加しています。お客様に有用なサービスは何か、少人数のチームで議論を重ねています。顧客視点を第一にサービスを作り上げていくことにやりがいを感じています。

研究開発チームは外部の機関と連携を取って最新の技術動向を調査。自然言語処理やウェアラブル製品などを使った未来の取材の形を検討しています。

これからも技術者として、新しいビジネスの形づくりやイノベーションへ挑戦していきます。



異なるジャンル、 展覧会作りにも携わる面白さ

荻原 由希子 2006年入社
企画事業本部文化事業部

文化事業部には、展覧会と音楽・舞台公演を担う二つのチームがあり、私はいまは展覧会を担当しています。同時に数十件のプロジェクトが動いていて、部員は展覧会ごとにチームを組み、複数の案件を並行してこなします。

一つの展覧会の開幕までには企画立案に始まり、作品選定や借用先との交渉、会場との調整、ポスター制作など数えきれないほどの業務があります。PR会社や展示施工会社など、それぞれの道のプロの人たちと協力しながら、展覧会を作り上げていくのです。

ここ最近で担当したのは「チューリヒ美術館展」「連載完結記念 岸本齊史 NARUTO-ナルト-展」など。まったく異なるジャンルの展覧会作りにも携われる振れ幅の大きさが、この部の面白さでもあります。

展覧会に関する新聞原稿を書くこともあります。記者として赴任した奈良総局での1年半の経験が非常に役に立っています。

2017年春フェスティバルシティが誕生 音楽ホールと美術館、高級ホテルなど大阪の街づくりに貢献

2017年春、朝日新聞大阪本社や音楽の殿堂・フェスティバルホールのある「中之島フェスティバルタワー」(大阪市北区、12年完成)の西隣に、「中之島フェスティバルタワー・ウエスト」が完成します。高さ200メートルのツインタワーの完成で、大阪に新たなぎわいの街「フェスティバルシティ」が誕生します。「フェスティバルシティ」は、ツインタワー内の「フェスティバルホール」、2018年春に開館する予定の「中之島・香雪美術館(仮称)」という二つの文化施設を核として、約50店舗を擁する飲食・物販施設

「フェスティバルプラザ」、さらに高級ホテルやオフィスも加わり、2棟合わせて1万2千人が働く街となります。朝日新聞社は1879(明治12)年に大阪で生まれ、6年後に中之島に移転。以来130年にわたり、この地で新聞発行を続けてきました。ツインタワーが完成すると、実質上の創業の地での10年にわたる再開発プロジェクトが完結することになります。朝日新聞社は、水都・大阪のシンボルアイランドである中之島の発展を通じ、街づくりに貢献します。



2017年春完成予定
中之島
フェスティバルタワー・
ウエスト

中之島
フェスティバル
タワー

フェスティバル
ホール

フェスティバルシティ



フェスティバルホールでの公演

→名演の舞台フェスティバルホール

アーティスト・観客から高い評価

中之島フェスティバルタワー内に建て替えられた「フェスティバルホール」は、あらゆるジャンルの音楽に対応する最新鋭のホールです。

本格的な音楽ホールとして1958年に開館した旧フェスティバルホールは、「天井から音が降り注ぐ」と称された優れた音響が特長で、国内外の著名な音楽家による名演の舞台になりました。新ホールも音響特性や幅30メートルの広い舞台間口などの特長を受け継ぎ、アーティスト、観客の双方から高い評価を受けています。



中之島・香雪美術館(仮称)の完成予想図

→国宝や重要文化財の展示も可能

中之島・香雪美術館(仮称)

「中之島・香雪美術館(仮称)」は、朝日新聞社の創業者・村山龍平が収集した日本・東洋の古美術品などを収蔵する美術館として、1973年に神戸市に開館した公益財団法人「香雪美術館」の分館としてオープンする予定です。国宝や重要文化財の展示も可能な本格的な施設となります。

2017年秋完成予定 東京創業の地、 銀座6丁目に新ビル建設

大阪で誕生した朝日新聞の東京創業の地、中央区銀座6丁目に2017年秋、地下2階地上12階建ての「銀座朝日ビル(仮称)」が完成する予定です。

ブランドショップや老舗が並ぶ銀座中心部の並木通りに面し、1、2階は商業施設、3～12階のホテル部分には、日本初進出のラグジュアリーホテル「ハイアット セントリック 銀座 東京」が入ります。

1888(明治21)年に東京での創刊を果たし、2カ月後に当時京橋区瀧山町と呼ばれたこの地に建物を取得。1927(昭和2)年に、現在の有楽町マリオンに本社を移転するまで、東京の拠点として新聞を発行しました。

「三四郎」「ころ」といった連載小説を生んだ夏目漱石のほか、歌人の石川啄木も働いていました。新ビル前の歩道には、啄木の歌碑「京橋の瀧山町の 新聞社 灯ともる頃のいそがしさかな」が設置されています。



銀座の街並みと調和した外観イメージ



サッカー

Jリーグはじめ、幅広く大会を応援

サッカー日本代表、Jリーグ、アジアサッカー連盟などのスポンサーとして、サッカー界を幅広く応援しています。国内の日本代表戦で定期的実施する「プレスキッズ」は読者の子どもたちに記者、カメラマンの仕事を体験してもらいます。現役代表選手などを招く「朝日新聞サッカー応援イベント」には子どもたちを招待し、サッカーを通して少年少女の夢を後押しします。Jリーグではスポーツで豊かな国をめざす「DO! ALL SPORTS」の理念に基づき、スポーツ体験教室などを開催。全国で

年に50回以上開く「朝日新聞ファミリーサッカースクール」は毎回約100組の親子が参加します。そのほか男女約300チームが集う「全国少年少女草サッカー大会」、高校生年代の日本一を決める「高円宮杯全日本ユース(U-18)サッカー選手権大会」、「皇后杯全日本女子サッカー選手権大会」、男女の「全日本大学サッカー選手権」、「古河マスターズサッカー」「全日本女子フットサル選手権大会」など各カテゴリーの大会を主催、後援しています。



全日本大学駅伝対校選手権大会 「50回」の節目に向けて

全日本大学駅伝対校選手権大会は、名古屋・熱田神宮から三重・伊勢神宮までの8区間106.8kmにわたって、たすきをつないで走り、「駅伝の大学日本一」を決める大会です。大会の新しいロゴマーク、MVP賞を設けたのに続き、2015年の第47回では、実力で代表校の選手に引けを取らない選手らにも出場の道を開こうと、東海学連選抜チームに加え、東海を除く全国7地区の選抜選手でつくる全日本大学選抜チームを創設しました。2018年に迎える第50回記念大会の節目に向けて、さらに内容の充実を図っていきます。



高校野球

2018年には第100回迎える国民的行事

「夏の風物詩」としてファンから支持される阪神甲子園球場での全国高校野球選手権大会は、2015年の第97回大会で100年の節目を迎えました。1915年に全国中等学校優勝野球大会として朝日新聞社が立ち上げて以来、若人のスポーツのあるべき姿を追い求め

ながら国民的行事に成長しました。大会期間中の入場者数は8年連続で80万人を超え、この世代のスポーツ大会では世界でも類を見ない規模を誇っています。

大会の収益は、大会運営のためだけでなく、共催する日本高校野球連盟の各種事業に活用され、2015年には



18歳以下のワールドカップを日本で初めて開催し、日本代表は準優勝に輝きました。2年後には第100回大会を迎えます。年数と回数合わないのは、戦争による中断があるからです。さまざまな困難を乗り越えてきた大会をさらに発展させ、地道な普及活動も忘れず、次の100年につなげていきたいと考えています。



障がい者スポーツ支援

シンポ開催や、競技発展をサポート

多様な個性が認め合い、共存できる社会の実現に貢献したい。そう願って障がい者スポーツの支援に力を入れて



ています。障がいのある人たちが快適にスポーツを楽しめるまちづくりは、超高齢社会の課題解決に

もつながります。2015年10月には「障がい者スポーツシンポジウム 支えあい、輪を広げよう」を開催。普及活動の先駆者である元車いすバスケットボール日本代表の根木慎志さん、義肢開発を進める元陸上選手の為末大さんらを招き、環境充実への道を探りました。また、日本ブラインドサッカー協会のスペシャルパートナーとして、健常者と視覚障がい者が協力してプレーする競技を支援しています。

2020年には東京に2度目のパラリンピックがやります。大会の成功はもちろん、さらにその先を見据え、多角的な支援に取り組んでいきます。



チャレンジA

世界で活躍する選手、小中学生を指導

スポーツを通じて子どもたちに挑む心を育んでもらおうと、2014年から「チャレンジA」を実施しています。



小中学生があまり取り組んだことのない競技や種目に挑戦、世界で活躍する選手たちが指導にあたります。選手が経験を語る講演もあります。2015年は立教大学池袋キャンパスで開催しました。挑んだ競技は卓球、車いすバスケット、水球など10種目。卓球は五輪メダリストの石川佳純選手が、手取り足取り指導しました。2020年の東京五輪・パラリンピック開催に向けてスポーツ熱が高まる中、次世代の成長のお手伝いをしたいと考えています。

朝日地球環境フォーラム 温暖化対策テーマに、未来を考える

2008年から毎年、「朝日地球環境フォーラム」を開催しています。国内外の識者、政策決定者、企業の人たちとともに、国際的な視点で温暖化対策を話し合い、地球のよりよい未来を考え続けています。

15年は10月1日と2日に延べ3600人が参加して、東京の帝国ホテルで開かれました。米国、中国、日本の専門家が、脱炭素社会へ向けてパネル討論を展開。青色LEDの開発で14年にノーベル物理学賞を受賞した中村修二さんと、フリーアナウンサーの滝川クリステルさんは、先端技術と地球環境をテーマに対談しました。



メディア・パートナー ドイツのメルケル首相迎え、講演会

ドイツ・メルケル首相の訪日にあたって、朝日新聞社は同国首相府のメディア・パートナーに選ばれ、財団法人ベルリン日独センターとの共催で、2015年3月、メルケル首相の講演会を東京本社（浜離宮朝日ホール）で開きました。首相は、日独の、敗戦から経済大国に復活した共通点に触れ、国際社会での両国の責任の重さを訴えました。



東京本社を見学するメルケル首相

講演するメルケル首相

復興支援音楽祭 「ゆず」が子どもたちとコラボレーション

東日本大震災からの復興を後押ししようと、2015年3月、三菱商事、福島放送とともに「復興支援音楽祭 歌の絆プロジェクト」を、福島県郡山市で開きました。人気ミュージシャン「ゆず」が、未来を担う子どもたちとコラボレーションしました。

14年の復興支援音楽祭では、ゆずが被災地の中高生たちと「合唱」でコラボしましたが、15年は「祭り」がテーマ。福島の伝統芸能団体が舞台上がり、「請戸の田植踊」といった演舞を披露しました。ゆずはミニコンサートの後、被災地への思いが込められた「友～旅立ちの時～」を全員と合唱し、会場は一体感に包まれました。



緑のバトン運動 苗木を育て、被災地に植樹

緑のバトン運動は、東日本大震災の被災地産の苗木を学校が購入して子どもたちが育て、被災地に送り植樹する運動です。2012年度にスタートし、16年度までの5年間で計1万本の苗木を育ててもらう予定です。

全国の子どもたちに、被災地のことを忘れないでほしいとの願いを込め、森林文化協会、国土緑化推進機構とともに始めました。15年度は岩手県田野畑村、宮城県岩沼市など東北4県の被災地で、地元の小中学生らも参加して約2千本の苗木を植樹しました。



苗木育成校のひとつ、神戸市の有馬中学校の生徒たち

厚生文化事業団 被災者救援や高齢者福祉に注力

朝日新聞厚生文化事業団は、読者の皆さんなどからいただいた寄付を充てて、子ども、障がいのある人、高齢者を3本柱とした福祉事業に力を注いでいます。また、東日本大震災の被災者救援事業にも継続的に取り組んでおり、岩手県陸前高田市には2013年2月、地域交流拠点「朝日のあたる家」を開設し、認知症のある人やその家族らが集う「認知症カフェ」や、大切な人を亡くした子どもたちに寄り添う「グリーフサポート」のプログラムを定期的に行っています。仮設住宅や学校、福祉施設などを音楽家や力士が訪問する「被災地ビジット」では、15年10月までに110カ所を訪問しました。



岩手県陸前高田市に開設した地域交流拠点「朝日のあたる家」

朝日新聞社は、総合メディア企業として、グループ企業・関連団体とともに、みなさまと歩み続けます。

ザ・ハフィントン・ポスト日本版 1500万ユーザーに支えられているニュース&ブログ・オピニオンサイト

米国生まれのニュース&ブログ・オピニオンサイト「ザ・ハフィントン・ポスト日本版」は朝日新聞社をパートナーに2013年5月に創刊され、月間1500万を超えるユーザーに親しまれています。月間ページビューも1億を突破しました。人と人、人と世界をつなぐソーシャルメディアを重視して、国内外の多彩な論点を紹介。「報道ステーションSUNDAY」(テレビ朝日系)のメインキャスターとして活躍する長野智子さんを編集主幹に迎え、国際ニュースの充実を図るとともに、格差社会や地方創生、ダイバーシティやLGBT(性的少数者)など、世相をかたちづくる重要なテーマの掘り起こしに努めています。こうしたコンテンツ拡充と、すべての記事をページ分割せずに表示するユーザーフレンドリーを意識したサイト運営により、日本



開設2周年イベントで議論を交わす日本、韓国、インドの各編集主幹(左から)＝2015年5月、東京都内

版は世界15の国・地域で展開する「ハフポスト」ブランドの牽引役を務めています(2015年11月現在)。

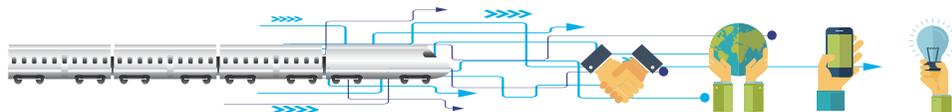
朝日インタラクティブ 「CNET JAPAN」など多様な専門情報サイトを展開

朝日新聞、朝日新聞デジタルが「ニュースの総合パートナー」だとすると、朝日インタラクティブは「専門店街」のイメージです。多様な専門情報サイトを展開しています。

「新しいテクノロジーが新しいビジネスを創造する」をコンセプトに、ITビジネスの情報を一般ユーザー、企業のリーダー、IT技術者向けに発信する「CNET Japan」「ZDNet Japan」「Tech Republic Japan」、国際ニュースの日本語版ポータルサイト「CNN.co.jp」、鉄道ファンにはおなじみの老舗サイト「鉄道コム」……。

情報発信だけでなく、ITを駆使して新たな市場開拓に取り組んでいるビジネスパーソンと読者がコミュニケーションするライブイベント、志ある起業家を応援する表彰イベントなど、多彩な催しにも取り組んでいます。

サイト運営で培った高い技術力を生かして、グループ企業や関連団体のサイト開設やシステム構築にも力を発揮しています。



朝日新聞出版 「週刊朝日」「AERA」など発行、単行本も幅広い作品送り出す

新聞がごはんなら、出版は食後のスイーツ。人生を豊かに。そんな思いを胸に、雑誌や本をつくっています。朝日新聞出版は2008年、朝日新聞社の出版本部が独立して生まれました。若い出版社ですが、私たちの出版活動は新聞社と同じ長い歴史を刻んでいます。

雑誌は、総合週刊誌として日本で最も伝統があり、もうすぐ創刊100年を迎える「週刊朝日」、独自のブランドを確立した週刊誌「AERA」をはじめ、月刊誌の「アサヒカメラ」「ジュニアエラ」「メディカル朝日」「一冊の本」など、計14誌を定期発行しています。

単行本は小説からノンフィクション、漫画まで幅広い作品を送り出しています。新書、文庫、選書もそろえ、刊行する本は年間約500冊に上ります。新書「下



流老人」は2015年のベストセラー。パートワーク(分冊百科)も日本の草分けです。電子書籍は主な電子書店の売り上げでベスト10社に食い込んでいます。

朝日学生新聞社 朝日小学生新聞と朝日中高生新聞を発行

朝日学生新聞社は、子どものころから新聞を読む習慣を身につけ、文章力や読解力、考える力をつけてもらうことを願い、「朝日小学生新聞」(日刊、ブランケット判、8ページ)と「朝日中高生新聞」(週刊、タブロイド判、20～24ページ)を発行しています。

「朝日小学生新聞」の創刊は1967年。ニュースを子どもの視点で解説し、漢字はふりがなつきです。毎日届く生きた教材として朝日新聞購読家庭だけでなく小学校や学習塾などでも購読されています。そのほか、

幼稚園児向けの「朝日らんたろう新聞」や保護者向けの「朝日おかあさん新聞」「朝日進学情報」などの別刷りを月1回発行しています。朝小リポーター(子ども記者)制度やコンクール、サマースクールなどの読者参加型イベントにも積極的に取り組んでいます。

「朝日中高生新聞」は1週間のニュースのダイジェストやニュースまんが、いろいろな職業を紹介するコーナーなどが好評です。また、約180人の朝中高特派員が活躍しています。





吹奏楽コンクール

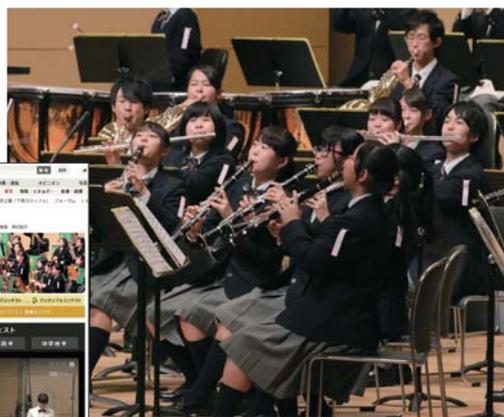
あこがれの舞台、紙面とデジタルで発信

生活を豊かに彩るのが音楽です。朝日新聞社は吹奏楽のコンクールである「全日本吹奏楽コンクール」「全日本マーチングコンテスト」「全日本アンサンブルコンテスト」などを全日本吹奏楽連盟とともに主催しています。

吹奏楽連盟の加盟団体の約8割は中学校・高校の吹奏楽部が占めます。そのあこがれの舞台「吹奏楽の甲子園」が「全日本吹奏楽コンクール」です。紙面のほか、朝日新聞デジタルでは中学・高校の部の演奏ダイジェストを動画で配信するなど、人気の高まる吹奏楽の魅力を多彩にお伝えしています。



朝日新聞デジタルでの動画配信



合唱コンクール

幅広い年齢層の活動を後押し

吹奏楽とともに、アマチュア合唱の普及にも努めてきました。全日本合唱連盟と毎年、「全日本合唱コンクール」や「全日本おかあさんコーラス」を主催しており、全日本合唱コンクールは2015年で68回を数えました。

合唱連盟に加盟している団体は約5200に上ります。中学校・高校の合唱部、社会人の愛好家のグループ、おかあさんコーラスに参加する女声合唱団の三つを中心に、幅広い年齢層の方々の活動を後押ししています。



表彰事業

朝日賞はじめさまざまな分野で主催

朝日新聞社は、さまざまな表彰事業を主催しています。代表的な朝日賞は、学術、芸術などの分野で傑出した業績をあげ、日本の文化や社会の発展に多大な貢献をした個人、団体に贈る賞です。1929(昭和4)年に創設。幹細胞生物学者の山中伸弥さんや物理学者の梶田隆章さんをはじめ、後にノーベル賞や文化勲章を受ける受賞者も数多く出ています。2014年度は、北里大学特別栄誉教授の大村智さん(15年にノーベル医学生理学賞受賞)、建築家の坂茂さん、脚本家の山田太一さん、抗エイズ薬を発見した熊本大学大学院教授の満屋裕明さんが受賞しま



2014年度の朝日賞、大佛次郎賞、大佛次郎論壇賞の受賞者のみなさん

した。また、マンガ文化に大きな足跡を残した故手塚治虫氏の功績を記念し、1997年に創設されたのが、手塚治虫文化賞です。2016年には第20回の節目を迎えます。

朝日新聞社の主な表彰事業

- ・朝日スポーツ賞
- ・大佛次郎賞・大佛次郎論壇賞
- ・朝日広告賞
- ・木村伊兵衛写真賞



企画事業

鳥獣戯画展に44万人、機動戦士ガンダム展も好評

京都、東京で開催した「鳥獣戯画展」は、朝日新聞文化財団が修復を支援した成果を公開したもので、両会場で44万人を集めました。東

京、九州、神戸の3都市を巡回した「大英博物館展」は、30年近くにわたる大英博物館への支援によって数年に一度実現している特別展

の一環です。朝日新聞社は、文化財の保護や修復を通じて世界の著名美術館・博物館と特別な友好関係を築き、質の高い大型展を数多く提供してきました。有楽町マリオンや浜離宮の音楽ホール、大阪のフェスティバルホールでの音楽催事とともに、今後もより高いお客様の満足と付加価値の創出に挑戦し続けます。

また、大ヒット漫画「NARUTO -ナルト-」やテレビアニメの名作「機動戦士ガンダム」など若者に訴求するテーマにいち早く取り組んでいます。フィギュアや雑貨など数百種類のグッズも大好評で、今後もキャラクター展に一層、力を入れていきます。



鳥獣戯画展



機動戦士ガンダム展



朝日新聞サービスアンカー(ASA)

「戸別宅配」を守り、読者と地域から信頼される拠点に

毎朝毎夕、暮らしに役立つ情報満載の新聞が届く——。この当たり前風景を支えるのが、全国2千カ所以上



にあるASAです。約6万人の従業員が日々、紙面の魅力をお伝えしています。

ASAは、読者の皆さまと地域に信頼される拠点づくりにも力を入れています。「新聞は言葉を学ぶ教材」。2015年の日本新聞協会の地域貢献大賞に選ばれた朝日新聞販売所、ASAニュータウン西白井(千葉県白井市)の能登昭博所長は言います。受賞は、地域の小中学生に記者体験やミニ新聞づくりを通じて活字に親しむ機会を提供してきた活動が評価されてのことでした。大阪市東淀川区で認知症サポーター養成に取り組むASA上新庄(加藤輝雄所長)にも地域貢献特別賞が贈られました。



各本社や工場の見学会

年間8万6千人が参加



東京本社

各本社、工場で実施する見学会に2014年度は、約8万6千人が訪れました。

東京本社では報道・編成局の編集フロアや、輪転機で新聞が印刷される様子を見ることができます。目や耳の



大阪本社

不自由な方に対応したツアーや、英語でのツアーもあります。大阪本社では、記者たちが出題したクイズを解きながら、編集の仕事を楽しく学べます。見学者には、見学記念写真を入れた「見学記念号外」を差し上げています。



インターンシップ

最長5日間の職業体験を用意、記者コースは総局訪問も



学生向けのインターンシップにも力を入れています。大学3年生や大学院1年生を中心に、記者・ビジネス・技術の各コースで、最長5日間の職業体験ができます。

例えば記者コースは、

記者育成に携わる社内組織「ジャーナリスト学校」が中心になって組み立てたプログラムを用意しています。本社(東京・大阪)で3日間、地方総局で2日間、講演や見学、取材・出稿を通して、記者の仕事を実感できます。特に、若手が配属されることも多い地方総局への訪問は、「記者生活がイメージしやすい」と好評です。詳細はホームページ(<http://www.asahi-intern.com/>)でも紹介しています。

従業員満足のために

● 育児・介護休業制度

育児休業期間は法定を上回る「満2歳の年度末まで」。慣らし保育のため、さらに1カ月延長でき、毎年、男性を含めて約30人が取得しています。復職後に利用できる託児所やベビーシッター補助もあります。介護休業期間は法定を上回る「最長1年(分割取得可)」です。

● 短時間勤務制度、ジョブ・リターン制度

育児・介護中の社員は短時間勤務や始業・終業時刻の繰り上げ・繰り下げができます。出産・育児・介護などのために退職した社員は再雇用制度(ジョブ・リターン制度)が利用できます。

● 留学・自己充実休暇制度

会社負担で派遣する記者部門の語学留学制度のほか、全部門で使える「語学・ビジネス留学制度」や有給の「私費留学休暇制度」もあります。また、自己啓発や社会貢献活動、配偶者の海外赴任同行を対象にした「自己充実休暇制度」も実施しています。

● 休日・休暇

年間の休日105日、年次有給休暇25日のほか、勤続満5年から5年ごとのリフレッシュ休暇や半日休制度、連続休日制度を設けています。

● 両立支援

次世代育成支援行動計画に基づき、「子育てサポート企業」として「くるみん」認定



マークを取得しています。また、管理職の意識改革を進めるため、2015年12月にNPO法人ファザーリング・ジャパン主催の「イクボス企業同盟」に加盟しました。

● 研修

記者部門は入社後3年間、専門部署のジャーナリスト学校が体系的な記者教育を実施しています。ビジネス・技術部門の社員には入社年次別の階層別研修、管理職には新任次長・部長研修、評価者研修、人権・差別問題研修など、積極的に人材育成に取り組んでいます。

● 自己啓発支援

財務のスキルやコミュニケーション能力向上の研修のほか、eラーニングでも多様な講座を体験できます。外部研修では、費用を援助する仕組みもあります。

● 社内公募・自己申告制度

春と秋の自己申告で、経験したい仕事や希望の勤務地などをアピールでき、最適な人材配置やワーク・ライフ・バランスのきめ細やかな運用に活用しています。新たな事業などを中心に意欲やアイデアのある社員を抜擢する社内公募も実施しています。

● 障がい者雇用

障がい者の雇用促進と働きやすい環境の整備に取り組んでいます。障がい者の方は記者・ビジネス・技術部門のさまざまな部署で働いており、障がいの有無による待遇の差はありません。





創刊号1



朝日新聞紙面で初めて登場したニュース写真。さんごうの向こうに3人の日本兵が立ち、日章旗が見える2



第1回全国中等学校優勝野球大会兵庫県大会の決勝戦3



関東大震災を報じた朝日新聞の表紙。9月3日付の号外4



2・26事件 反乱軍に倒された活字棚5



国民と共に立たん6

明治	1879・1・25	朝日新聞第1号、大阪で発行＝1
	1888・7・10	東京朝日新聞創刊。翌年1月から大阪では「大阪朝日新聞」に
	1890・11・25	東京朝日、付録の国会議事録などの印刷に日本新聞界初の輪転機を本格稼働
	1904・1・5	大阪朝日で「天声人語」欄はじまる
	1904・9・30	朝日初の報道写真、日露戦争特派員による戦地写真を東京朝日に掲載＝2
	1907・4・1	夏目漱石が東京朝日に入社。入社第1作「虞美人草」以降、小説は全て朝日に連載。文芸欄も創設。「明暗」連載中の1916年12月9日に50歳で死去
	1909・3・1	石川啄木が校正係として東京朝日に入社。翌年9月「朝日歌壇」選者に
	1911・6・1	東京朝日に索引部（その後、調査部と改称。日本の新聞界初）
	1911・11・17	朝日新聞初の女性記者・竹中繁子が東京朝日に入社
	大正	1915・8・18
1918・8・25		大阪朝日夕刊に掲載した寺内閣内閣批判記事が安寧秩序を乱したとして、朝日新聞の発行禁止を要求した裁判に（白虹事件）。社長が辞任、編集・論説幹部も退社
1919・12・3		大阪朝日、普通選挙促進大演説会を主催、以降各地を巡回し、普通選挙実現キャンペーンを25年の普選法成立・公布まで続けた
1921・11・12		ワシントン軍縮会議に先だって、朝日は社説などで軍縮キャンペーンを展開
1922・4・2付		「週刊朝日」創刊（2月創刊の「旬刊朝日」を週刊化）
1922・10・21		記事審査部の創設を社告。日本の新聞界で初めて
1923・9・1		関東大震災で東京朝日の社屋が全焼、12日に4ページで朝刊発行を再開＝4
1928・1・1		震災救援などを機に朝日新聞社会事業団（現・朝日新聞厚生文化事業団）設立
1928・8・27		東京・大阪間で社機による旅客輸送を開始、日本初の商業飛行
1929・1・1		創刊50周年で「朝日賞」を創設。翌年、第1回を坪内逍遙、前田青邨らに贈賞
昭和	1930・1・21	ロンドン軍縮会議にあたって、軍縮をキャンペーン
	1931・5・15	東京朝日、行財政整理座談会を開催、その報告連載や社説で朝日は軍部批判を展開した。陸軍は在郷軍人会などを使って朝日非買運動を起こした
	1931・9・18	満州事変勃発。大阪朝日、10月1日の社説で社論を満州国必要論に転換
	1935・2・11	九州支社で朝夕刊発行開始、11月25日には名古屋支社でも。全国紙態勢に
	1936・2・26	2・26事件。反乱軍が東京朝日の社屋を襲撃＝5
	1937・4・10	「神風」号、アジア・ヨーロッパ連絡飛行で世界記録を樹立
	1940・9・1	「大阪朝日新聞」「東京朝日新聞」の題号を「朝日新聞」に統一
	1945・11・7	「国民と共に立たん」を掲げ、戦争の間、事態の進展を国民に知らせなかった責任を明らかにし、社長以下幹部が辞任し、朝日新聞は国民の機関であると宣言＝6
	1949・11・30	「夕刊朝日新聞」に長谷川町子の漫画「サザエさん」連載開始
	1951・10・2	女性の投稿欄「ひととき」を新設
1952・9・1	朝日新聞綱領を制定。言論の自由を貫く、など4柱からなる	
1955・10・1	南極学術探検事務局を設置。翌年第1次観測隊が出発。第45次隊では中山由美記者と武田剛写真記者が2004年元日から05年3月まで南極支局を開設	
1958・8・1	公益財団法人日本対がん協会設立	



ミロのビーナス会場風景7



阪神支局が散弾銃で襲撃され、小尻知博記者が死亡、犬飼兵衛記者が重傷。名古屋本社襲撃、東京本社銃撃、静岡支局爆破未遂などが警察庁指定116号事件に＝8



阪神・淡路大震災を報じる1月17日付の夕刊9



東日本大震災を報じる3月12日付の朝刊1

昭和	1960・6・17	安保問題を巡る死亡流血事件で、在京7社共同宣言「暴力を排し議会主義を守れ」
	1960・10・24	教育設備助成会（現・ベルマーク教育助成財団）設立
	1964・4・8～	「ミロのビーナス」初のフランス国外展を東京・京都で。入場者172万人＝7
	1965・8・21～	「ツタンカーメン展」を東京・京都・福岡で。入場者は記録的な293万人
	1967・1・1	ベトナムと平和の年頭社説を世界5大紙と交換。5月に京都で世界主要新聞首脳会議
	1973・11・8	東京・新宿に「朝日カルチャーセンター」設立。翌年4月から営業開始
	1974・10・2	第1回「大佛次郎賞」に、中野好夫「蘆花徳富健次郎」と梅原猛「水底の歌」
	1976・2・5	ロッキード事件の第1報をスクープ。田中角栄前首相逮捕など大汚職事件に発展
	1978・9・1	公益財団法人森林文化協会設立
	1979・11・18	創刊100周年で第1回東京国際女子マラソン大会。世界初の公認女子マラソン
平成	1980・9・23	東京本社が有楽町から築地に移転。翌日夕刊からコンピューターによる新聞製作を始める
	1987・5・3	阪神支局が散弾銃で襲撃され、小尻知博記者が死亡、犬飼兵衛記者が重傷。名古屋本社襲撃、東京本社銃撃、静岡支局爆破未遂などが警察庁指定116号事件に＝8
	1988・5・24付	週刊「AERA」創刊
	1988・6・18	リクルート関連会社の株譲渡にからみ、川崎市助役の疑惑をスクープ。政財官界に広がる事件を調査報道、竹下登首相の辞職に発展
	1989・9・20	社外有識者5人で構成する「紙面審議会」が発足
	1992・8・22	東京佐川急便から金丸信・自民党副総裁に5億円提供とスクープ。自民党一党支配体制の崩壊へ
	1995・1・17	阪神・淡路大震災＝9。被災地向けにタブロイド判情報紙面を週1回発行
	1995・8・10	インターネットでのニュースサイト「アサヒ・コム」開設
	2001・1・1	記事による人権問題を社外委員で調査・審査する「報道と人権委員会」が発足
	2008・10・6	地球規模の出来事を取材する月2回の新紙面「GLOBE」創刊
2010・9・21	大阪地検特捜部の主任検事が郵便不正事件の押収資料を改ざんとスクープ	
2011・3・11	東日本大震災＝J。東京電力福島第一原発事故では、7月13日に論説主幹論文と社説特集「原発ゼロ社会への提言」、10月3日から「プロメテウスの罠」を長期連載、13年1月4日からは除染現場で手抜き作業が横行していると調査報道	
2011・5・18	朝日新聞デジタル創刊	
2013・1・2	大阪本社、中之島フェスティバルタワーに移転し新聞製作開始	
2013・5・7	日本版「ザ・ハフィントン・ポスト」開設	
2014・9・3	猪瀬前都知事への5千万円提供をめぐる一連のスクープで3年連続新聞協会賞	
2015・1・5	「信頼回復と再生のための行動計画」を公表	



本社機「あすか」

航空部90年

朝日新聞社に航空部が発足したのは1926（大正15）年。新聞の速報の使命を支え続け、2016年で90年になります。民間航空の草分け的存在で、戦前は郵便や旅客の輸送を手掛けたり、日欧間の横断飛行で世界最短記録を樹立したりしました。現在はヘリコプター4機と小型ジェット機1機で、空から写真やビデオを撮るなどしています。

朝日新聞社本支社所在地

東京本社	〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2	03-3545-0131	新聞題字
大阪本社	〒530-8211 大阪市北区中之島2-3-18	06-6231-0131	
西部本社	〒803-8586 北九州市小倉北区室町1-1-1	093-563-1131	
名古屋本社	〒460-8488 名古屋市中区栄1-3-3	052-231-8131	大阪・西部・名古屋
北海道支社	〒060-8602 札幌市中央区北2条西1-1-1	011-281-2131	東京・北海道
福岡本部	〒812-8511 福岡市博多区博多駅前2-1-1	092-411-1131	

朝日新聞社の海外総局・支局



社旗



大阪・西部・名古屋 東京・北海道

営業内容

日刊新聞の発行ほか

資本金・売上高

資本金 6億5,000万円(320万株)
 売上高 単体 2,886億2,900万円
 連結 4,361億3,600万円
 (第162期2014年4月1日～2015年3月31日)

社主

村山美知子
 上野尚一

社員数(2015年4月1日現在)

男性: 3,785人 女性: 812人 計: 4,597人

取材・印刷拠点

国内全都道府県と海外5総局34支局、計327の総局・支局があり、日々の取材拠点となっています。印刷は全国27カ所に拠点があります。

朝日新聞出版 主な出版物

- 定期出版物
 - 〔週刊誌〕 週刊朝日 AERA
 - 〔月刊誌〕 アサヒカメラ ジュニアエラ
 - 一冊の本 朝日新聞縮刷版 Journalism
 - メディカル朝日
 - 〔隔月刊〕 みんなの漢字 sesame Nemuki+
 - HONKOWA
 - 〔季刊〕 AERA with Kids AERA STYLE MAGAZINE
 - 小説トリッパー

■ パートワーク

横溝正史 & 金田一耕助シリーズDVDコレクション
 週刊マンガ日本史改訂版 コンパット! DVDコレクション
 大江戸捜査網DVDコレクション

■ 年次刊行物

朝日キーワード 朝日ジュニア学習年鑑 大学ランキング



週刊朝日



AERA



アサヒカメラ

CSR推進体制

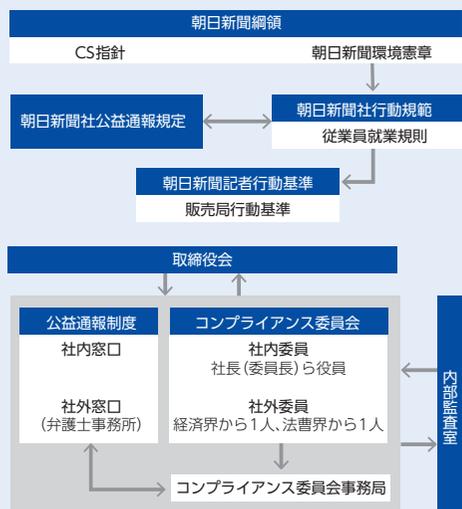
2010年4月1日、社長を委員長とした役員レベルの「CSR・環境委員会」が発足し、その下に「CSR・環境連絡会」を設けました。CSR推進部が事務局を務めます。

コンプライアンス体制

「コンプライアンス」という言葉は従来、「法令順守」の意味で用いられてきました。しかし、「法令を守っていけばすむ」というものではありません。法令を守るのは当たり前のことです。不正を暴露し、権力を監視するという報道機関の使命を果たすのはもちろん、さまざまな悩みや苦しみ、悲しみを抱える人々に寄り添い、問題をともに考え、解決しようとする双方向性のある紙面づくり、お客様を大切に販売、広告、企画事業等のあり方を追求するなど、朝日新聞への社会からの真の期待にしっかり応えていくことこそが、コンプライアンスなのだ、と私たちは考えます。

朝日新聞で働くすべての者が守るべき「朝日新聞社行動規範」を2006年4月に定め、同時に公益通報制度も設けました。社長を委員長とし、2人の社外委員も参加するコンプライアンス委員会が、問題があれば直ちに対応し、是正する態勢を整えています。グループ企業・団体を含め、朝日新聞グループは、今後もコンプライアンス意識の浸透に努めてまいります。

コンプライアンス体制 組織図・体系図



主なグループ企業・関連団体

新聞・出版・WEB
 ●朝日学生新聞社●朝日マリオネット21●アサヒ・ファミリー・ニュース●日刊スポーツ新聞社●日刊スポーツ新聞西日本●北海道日刊スポーツ新聞社●朝日新聞出版●朝日インタラクティブ●ザ・ファントム・ポスト・ジャパン●Asahi Shimbun America, Inc.(アメリカ社)

文化
 ●朝日カルチャーセンター(札幌、新宿、横浜、立川、湘南、名古屋、中之島、くずは、芦屋、川西、京都、福岡、北九州に教室)●朝日カルチャーセンター千葉

広告
 ●朝日広告社●朝日エージェンシー●朝日アドテック●関東朝日広告社●東日本朝日広告社●三和広告社●朝日エリア・アド●大阪朝日広告社●朝日広告社(小倉)●中部朝日広告(名古屋)

折込広告
 ●朝日オリコミ(東京)●朝日オリコミ大阪●朝日オリコミ西部●朝日オリコミ名古屋●朝日サービス(札幌)

印刷・発送
 ●朝日プリンテック●日刊スポーツ印刷社●トッパンメディアプリンテック東京●朝日弘前プリンテック●トッパンメディアプリンテック関西●朝日産業●北海道日刊スポーツ印刷社

販売支援・即売
 ●朝日新聞販売サービス●朝日トップス●朝日販売サービスセンター(大阪)●朝日販売サービス(西部)●朝日新聞販売サービス名古屋●朝日サポートセンター●新販(大阪)

旅行
 ●朝日旅行
 不動産・ビル管理
 ●朝日ビルディング●朝日建物管理●朝日新聞リアルエステート●赤坂池田タワー管理●有楽町センタービル管理●千里朝日阪急ビル管理

業務支援
 ●朝日新聞総合サービス

その他
 ●宮本商行●朝日エアポートサービス

放送
 ●テレビ朝日●北海道テレビ放送●名古屋テレビ放送●朝日放送●九州朝日放送●青森朝日放送●岩手朝日テレビ●秋田朝日放送●東日本放送●山形テレビ●福島放送●新潟テレビ21●長野朝日放送●静岡朝日テレビ●北陸朝日放送●広島ホームテレビ●山口朝日放送●瀬戸内海放送●愛媛朝日テレビ●長崎文化放送●熊本朝日放送●大分朝日放送●鹿児島放送●琉球朝日放送●ビーエス朝日●スカイ・エー

関連団体
 ●森林文化協会●こどもの国協会●ベルマーク教育助成財団●ウェブベルマーク協会●日本対がん協会●朝日新聞文化財団●朝日新聞厚生文化事業団●朝日21関西スクエア

朝日新聞定期購読のお申し込み
 フリーコール
0120-33-0843



この冊子の印刷用紙は、適切に管理された森林で生産されたことを示すFSC 森林認証紙を使用しています。



この冊子のインキは、再生可能な大豆油、亜麻仁油、桐油、ヤシ油、パーム油等の植物由来油、およびリサイクルした再生油を使用したベジタブルインキを使用しています。



この冊子の印刷工程では、刷版の版材がインキをはじくという特性を利用し、有害廃液を出さず、水はくという特性を採用しています。